

夏のお伽譚

長沼せき子

蛙のお稽古

太郎さんの家のお庭の隅に、小さい水溜りがありまして、其傍に、赤ちやんと青ちやんと云ふ兄弟と、お母さんとが住んで居る、蛙の家がありました。

赤ちやんも、青ちやんも、やつと此間、オタマシヤクシから、蛙になつた計りで、まだ飛んで歩く事も、水の中を泳ぎ廻る事も、出来ないものですから、毎日お母さんが家の外に連れて出まして『さア、飛ぶお稽古をしてあげますから、お母さんの通りにするんですよ』と仰つてわ「ピヨンと飛び上つて見せるのです。すると青ちやんも、赤ちやんも、お母さんの様にピヨンと飛んで見るので

すが、矢張りお母さんの様に上手には出来ませんから、赤ちやんわ『僕お母さんの様に飛べないんですもの、つまらないなア』と云いますと『段々上手になりますよ、さア、も一度飛んで御覽！、ソラお手をも少し縮めるんですよ』と、お母さんが又教へて下さるので、赤ちんも、青ちやんも、一生懸命お稽古致しましたから、ずん／＼上手になつて行くのです。

すると此度わ泳ぎの稽古を初めまして、初めわ岸の方でポチャ／＼して居たのですけれど、これもお母さんに教わつて、ドボンと水の中にく／＼つてわ、スーッと向ふ岸に泳ぎつく事まで覺えてしましました。

ある日お母さんわ、兄弟を呼んで『赤ちやんも

青ちやんも、飛ぶ事も泳ぐ事も大變上手になつたから、もう遠くへ行つても好いのですけれど、お母さんがいつも云うて居る事は忘れてわなりませんよ』と申渡されました。

さア兄弟は嬉くつて堪ません『嬉しいな〜、お母さん遠くのお外にも、こんな水溜りがありますの？』ときき、ますと、お母さんは『エ、ありますとも〜、この水溜りを幾つとも〜集めたよりも、もつと大きいお池つて云ふ水溜りがありますよ、そこにわ太郎さんのお舟も浮いてますし、美しい金魚さんも澤山住んで居るんですよ』と、仰いました、青ちやんは目をクルクルつと廻しながら『お母さん僕お舟と泳ぎつこしたつて敗けませんよ、金魚さんとだつて敗けませんねえ』と云いましたら、赤ちやんも『僕だつて敗けませんねえ』と云つて、兄弟はすぐとお母さんに御暇して、喜び勇んでピョン〜飛び立つて行きまし

たけれど、赤ちやんも、青ちやんも外へ出たのは初めてなものですから、あつちを眺めたり、こつちに立寄つたりして、お庭の中程迄飛んで行つた頃に、もうそろ〜くたびれてきました、赤ちやんわ『青ちやん僕もう飛べなくなつたの、お池つてまだ遠いのかしら？』つて云いますので、青ちやんは、赤ちやん弱虫だなア、僕だつて疲れたんだけれど、いつもお母さんは我慢すると強くなれるつて仰るだろう、だから僕我慢するの、ね、もう少し休んで又飛んで行きませうよ』つて赤ちやんを助けながら、石の上に暫く休んで、又出かけたので、とう〜お池の傍に来てしまいました。兄弟はもう疲れも何も忘れてしまつて『アツ大きなお池だねえ、お舟が一人で動いてますよ、ソラ此方へ来る、面白い〜』と見とれて居ましたが、兄弟は相談して『金魚さん、金魚さん、私達も這入つて遊んでも好いでせうか』ときき、ますと、尾

鰭をヒラ／＼振りながら、金魚がみんな出て来て、『蛙さんか、よく来ましたね、さ、早く這入つてお遊びなさい、ホラこ、が一番深いんですよ、氣をつけてね』つて云ひましたので、兄弟はすぐと、ドボンと這入つてスツスツと泳ぎ初めました、これを珍らし相に眺めて居ました金魚達は『ヤア蛙さんは泳ぎが上手ですね、じやみんな泳ぎつこしませう、ホラー、二ツ三！』泳ぎつこが初まるやら、蓮の葉のお舟でかけつこしたり、金魚の家で遊んだりしてましたが、それにもあきた赤ちやんと青ちやんは、『金魚さん、ホラあそこに浮いてるお舟ね、僕あれに乗つて見度いの、つて云いましたら、金魚は一寸考へて『もう太郎さんがお歸りの時かも知れませんが、それ迄お乗なさい、私達動かして上げますから』つて、すぐにきて呉れましたから、兄弟は大喜びでビヨンと飛びのりますと、金魚は大きい頭の先で、お舟をス

ツと走らせて呉れるのです、他の金魚は、赤と白に絞つた鰭を、旗の様にヒラ／＼動かしながら、お舟を圍んで進みます、兄弟はもう何も彼も忘れて『日本海軍萬歳！お池の金魚さん萬歳！』と有り丈け大きい聲で叫びましたとたん、『ヤア蛙の舟乗り面白いナ／＼』つて云ふ太郎さんの聲に、ビツクリしてドボンと水に這入つて、又ソイツと首を出して見ましたら、ニコ／＼御覽になつていらしたお日様も、西の山にお入りになつた後でしたので、兄弟はくり返し『金魚に御禮を云うて、やがてもと来た途をビヨン／＼／＼大急ぎで家へ歸つて來したら、お母さんはいつもの様にニツコツして抱き占て下さいましたとき。

螢のいくさ

むかしお日様が、初夏の森の上をニコ／＼笑いながら、いつもの様にお通りになりますと『ギャ

『くく』何の聲ともつかぬ音が、風に乗つて、木の間を縫うて行くのです、お日様は直ぐとそれをお呼び止めになりました『コラ、お前達は一體何の聲なのか、そして何處へ何しに行くのか』と、おきゝになりました。すると其聲は風の上からヒョイと飛びおりて『ハイ、私共は螢の聲で御座いました、何の用事か知りませんが、これから螢光殿迄参ります處で御座います』と、云ひながら、又ヒラリと風の上に乗つて、ガヤ／＼急いで森の奥の方へ飛んで行つてしまいました。お日様は不思議な事だと思ひながら、後を見送つてお出でになりますと、又さつきと同じ様な聲が、走つて行きますから、『コラ、螢の聲まで』と、此度はすぐと用事を御尋になりました。『コレは折角の御尋ねで御座いますが、私にも全體何の御用なのか解りません、只此處からすゝつと先きの小川の邊りに、私共の持主の螢さん達が、大

勢集まつて、ガヤ／＼申して居られますので、其ガヤ／＼の私共は、螢光殿迄ガヤ／＼注進して参らねばならないので御座います』と、口早やに云いますので、『オ、そりや御苦勞々々』と聲に別れて、相變らずニコ／＼四方を照しながら、やがて森を通り抜けた、小川の上に来て見ますと、成程、幾萬の螢が青々と草の茂つた兩岸に集つて、赤い頭を振り立て、ガヤ／＼さわいて居るので

お日様は、成程、夏が来たので光を貰いに行くんだナ、それにしても一體何をさわいて居るんだらう』と、つく／＼御覽になりますと、これはまた一方の岸には體の大きい羽の黒光りする、鬚の長い、見るから立派な螢共が堂々と陣を張つて、對岸を見詰めて居るのです。又一方の岸には、體は小さく、羽も汚れては居りますが、丈夫な頭を行儀よく並べた螢共が限りもなく對陣して居る

のです。お日様は面白い事に思いながら、お空の上からち一つと耳を澄してお聞きになりますと、それは大變な事を云つて居るのです。

まづ小さい方の一匹が『泥水だつて、お米の取れる田の岸で生れた平氏蟹だもの、一番強いに定まつてます』と、云いますと『銀の砂の上を、水晶の様な水が流れる川岸で生れた源氏蟹に勝てるものがありますか』と、大きい體を揺りながら一匹が申します『其通々々々、人間の源氏も平氏を滅ぼしたんですもの』と、他の一匹が合槌を打ちます。

すると又、一匹の小さいのが『源氏も一度は平氏に敗けました、體計り大きい弱虫は、何の役に立ちません』と云いますのをきくと、又一匹の『小さい羽ぢや飛べません』と手をうつて云いますので、とうとう『じや戦をさせよう』『面白い々々々』、『賛成々々』と又ガヤ／＼と初めますと、平

氏の大將が『よしッ、戦さ々々！我軍氣を付けッ』と小さい體をピンとそらせました。

大きい源氏も敗けては居りません『よしッ、さア、全軍進めッ』と、今にも川を飛び越えて入り亂れ様としました時、お日様は不意に『コラ／＼蟹共待てッ』と凜とした聲でお呼び止めになりましたから、今迄さわぎ立つた蟹共も、ハッとお空を見上げますとお日様の金の冠りがキラ／＼と目に映りましたので『これはお日様で御座いましたか、私共は種々な事情から、是非戦さをする事となりましたのですから、どうか暫くの間御免下さいませ』と頼みました。けれどお日様は『オ、よし／＼戦さがしたくば明晩ゆつくりさせてやるから夕方迄に螢光殿に集まつたらよからう』と、仰つたので、蟹共も仕方がありません、其ままズロ／＼お家へ引上げて、明晩を待つて居りました。やがて其日も暮れて、翌日お日様が西の山に靜

かにお這入りになりますと、待ちあぐんだ螢共は『さア、今夜こそ戦さをして勝たなきやならん』つて、彼方からも此方からも宙を飛んで行きましたから、見る間に御殿の前は眞黒な螢でうづまつてしまいましたと。御門がギューツと開いて、四方に輝く螢光の玉をお持ちになつた、お姫様が御出ましになつて『オ、みんなよく來ました、私は螢光姫と云ふ者です、きのふの事はお日様からすつかりきゝました、そして戦さをさして上げ様とも思ひましたが、其前にお前達に渡す丈けの光りを分けて上げ様と思ふのだが……』と、やさしいし、かも凜とした御聲が、みんなの上に響き渡りますと、螢共は云ひ合せた様に『アツお姫様、誠に有りがたう御座います、どうか是非光りをお分け下さいませ』と願いましたから、お姫様はニッコリして『それではみんなで、森の奥の谷底へ行つて、其處に祕藏である瓶のどれでも取つてお出で』と

仰いました。

そこで螢共は大喜びで、森の奥さして飛んで行きますと、御姫様の御話し通り、同じ色同じ形、同じ大きさの瓶に水が一バイ這入つて其處に並んで居りましたから、源氏組も平氏組も、すぐと其一ツを取つて、ヤツホツホ、ヤツホツホと、かけ聲勇ましく歸つて參りました。お姫様はまぢかねて『御苦勞でしたそれでは、其蓋をお取り！』と仰つて、お手に持つた螢光を、眞中からお割りになつて、二つの瓶の中にドブンとおなげ込みになりましたら、今迄晝の様に明るかつたのが、急に眞暗になつてしまいました。

するとお姫様は『さア、はやくみんな此瓶に近寄つて、中の水をお飲み！』と仰いましたので、螢共は代る代る『ありがたう御座います』と、御禮を云つてはチウ／＼水を飲んで歸りますと、不思議！今迄眞黒かつた體からピカリ、見事な光り

がさすのです、吃驚して他の方を見ますと、あつちでもピカリ！こつちでもピカリ！ピカリ！ピカリ！段々光りは多くなつて、やがて水のつぎると同時に、先刻の通りに明るさになつて、御姫様はニコ／＼とみんなを眺めて居らつしやいました。そして『みんなよくお聞き！お約束通り光りは分けて上げましたが、お前達はもう今晚から其光りであちら、こちらを照して歩いて、可愛い坊ちやん方や、嬢ちやん方を喜ばせて上げねばなりませんよ、解りましたか、それからお前達戦さがし度いのなら、其光りを私に返してそれからするのも好いでせう、さア、するんなら早くなさい』と仰いました、螢共はもう嬉しくつて、戦さなどは最早忘れてしまつて一刻も早く飛び廻つて見度いのです、ですから聲を揃へて、『お姫様ようく解りました、もう決して戦さなどは致しません、みんな仲よく遊びます』と、申上りましたので、お姫様は

さも御満足相に、『オ、よく云いました、それでこそ暗を照す螢共です、源氏螢は光りは大きいが数が少ないし、平氏螢は数は多いが光りは小さいが、両方共みんな集まれば、何方も同じ光りなのですから同じ様に強いんです、サア、みんな仲好くつてお出で』と重ねて仰いますのを『ありがたう御座います、さよなら』と一齊に御禮をして、やがて喜び勇んで飛び立ちましたら、其また體の軽い事！大きな森も、廣い野原も、谷も川も、暖く中に飛び越えて、いつか各自の方向に、暗から暗を照しながらフワリ／＼と流れる様に飛んで行かれるのです。そして百年経つた夏の夜も、千年経つたいつ迄も源氏螢も平氏螢も、仲よく暗の夜を照す事となつたのです。

かたつむり角振り分けよ須磨明石